

TOKYO 人権

人権と
スポーツ
2020

●インタビュー／佐藤勝枝、敏英、翼、駿
ボッチャと、私たち家族の物語

— 日本代表を目指す息子とともに、
家族で切り開く未来

●特集

子どもに「当たり前」の成長を
貧困の連鎖を断ち、
子どもの人権が守られる社会へ

●障害者も楽しめる

「立石ディスコ・アフタヌーン」

ボッチャと、 私たち家族の 物語

— 日本代表を目指す息子とともに、
家族で切り開く未来

さとう かつ え
佐藤 勝枝さん
とし ひで
敏英さん

つばさ
翼さん
しゅん
駿さん

ボッチャのおかげで今の私たち家族がある——。東京2020パラリンピック大会に向けて注目を集めるパラスポーツ「ボッチャ」。その日本代表を目指す大学4年生の佐藤駿さんを、一丸となってサポートする母・勝枝さん、父・敏英さん、兄・翼さん。ボッチャが家族に開いた未来とはどのようなものか。ある家族の軌跡を通して、パラリンピックが障害者の人権を実現するとはどのようなことなのか考えてみませんか。

— 駿さんと翼さんが生まれたときのことを
お聞かせください。

*以下、勝枝さん: (勝)、敏英さん: (敏)、翼さん: (翼)、駿さん: (駿)。

(勝) 駿と翼は、出産予定日より3か月早い、1995年10月28日に生まれた双子です。まず、長男の翼が695gで生まれ、その3分後に次男の駿が982gで生まれました。手のひらから手足がちょっとこぼれるほどの小ささで、体には産毛が生えていました。生後、一時的に体重が減ったときは、もう骨と皮のような状態で、保育器越しに見ているのはとても辛かったです。

(敏) 体は、ちょうど今、話題の赤ちゃんパンダくらいで、指はマッチ棒の細さくらいしかなくて、大丈夫だろうかと不安に思っていましたね。

— お子さんに脳性麻痺があることを、
どのように受け止めていますか。

(勝) 私が出産する前の時代は、これだけ短い妊娠週数と、この子たちほどの低体重では、命が助からなかったそうです。私が出産する時代では、命が助かって

狙いを定める弟・駿さん。脳性麻痺により常に緊張状態にある身体を制御するのは想像以上に体力を消耗するという。日本代表を勝ち取るにはミリ単位の精確な投球が求められる。(第18回東京都障害者スポーツ大会「ボッチャ競技」2017年7月22日)

障害を伴うことがほとんどでしたが、現在の医療技術だと、障害もなく元気な子どもに育つことが多いそうです。「今の医療だったら障害はなかったのに」と落ち込むこともありましたが、もっと前の時代に生まれていた子どもたちは、両親に会うこともできなかったのだと気づき、ようやく現実を受け入れることができるようになりました。

—駿さんがボッチャを始めた小学3年生ごろは、どんなお子さんでしたか。

(勝) 脳性麻痺と言っても障害の状態は人それぞれです。駿は知的障害を伴わなかったので、学校や教育委員会と話し合いを重ねて、どうにか普通の小学校に通わせました。しかし、体に不自由があるので、他の子が指を使って足し算を解くのには駿は指が使いません。そんな駿を見て、当時、駿が好きだった女の子が「駿君、かわいそう」と言ったそうです。それが相当ショックだったようで、「お母さん、勉強教えてくれ」って泣きながらお願いされ、親子で毎日3時間勉強したこともあります。

(駿) 僕は、字が上手く書けませんし、定規などの道具も使えないので苦労しましたね。今なら友達に手伝ってもらいますが、当時の小学校ではまだ障害者に対するサポートの意識は根付いていなかったで、親がいないと何もできませんでした。

(勝) ボッチャとの出会いは、家族で車椅子工場に出掛けたときです。小学3年生の駿に、当時のボッチャ協会の理事長が声をかけてくださったのです。どのようなスポーツなのかを知りたいと思い、皆で一度見に行くことにしました。そのとき、ご年配の方に交じって駿と同世代の子どもが1人、ボッチャをしていたのです。

(駿) その子が、昔、僕と入院先が一緒だった友達だったのです。僕は、その友達と遊びたいとの気持ちからボッチャを始めることにしました。学校には障害者はいませんでした、ボッチャを始めてからは障害のある人たちとたくさん交流するようになり、こういう世界もあるのだと勉強になりました。

(勝) 同じ練習場には、後に2008年の北京パラリンピック日本代表になる海沼理佐選手^{かいぬまり さ}もいました。海沼選手は、障害者が普通学級に通うことも、大学進学もできなかった時代を生きてこられた人です。公務員として働きながらボッチャの選手でもあるという、障害者スポーツの理想形のような人で、ご自身の体験を話



補助具(ランプ)を使ってジャックボールを狙う兄・翼さん。母・勝枝さんがアシスタントを務める。
(第18回東京都障害者スポーツ大会「ボッチャ競技」2017年7月22日)

してくれたり、私たちの話を聞いてくれたりして、とても救われました。

—ボッチャには、最初からご家族で関わってこられたのでしょうか。

(敏) 駿は、8歳でボッチャ協会理事長の特別推薦枠で日本選手権にデビューしました。それを家族で応援に行ってから、ずっと家族ぐるみで関わってききたね。試合を見るならルールを知っておいた方がよいと思い、私は審判資格を取り、妻は大会の運営を手伝うようになりました。大会の開催地は毎年変わるので、年に一度の家族旅行のような感覚でした。駿が中学生で国際大会に出場するとき「日本代表のユニフォーム格好いい！欲しいね！」と、ミーハーな気分で家族と盛り上がっていたのです。

(勝) これまでの大会で印象的だったのは「東京2009アジアユースパラゲームズ」です。翼は知的障害も併せ持ち麻痺の程度も重いために出場できる試合はほとんどありません。しかし、練習や試合会場にいつも来ていました。そうした翼を見て、当時のボッチャ協会の理事が大会のボール検査員という役割を翼に与えてくれたのです。こうした温かい部分と、競技として競い合う厳しい部分の両方を感じることができました。

また、駿はこの大会で、最年少でありながら団体戦のキャプテンを任せられ、銅メダルを獲得しました。これがテレビで取り上げられたせいか、ボッチャを始める人が増えたのです。それまでは選手が足りず、団体戦を組むことにも苦労していたのでうれしかったですね。

ボッチャとは？

パラリンピックの正式種目の一つ。ジャックボールと呼ばれる白いボールに向かって、赤と青のボールを投げたり転がしたりし、どれだけ近づけることができるかを競う。重度脳性麻痺者や、同程度の四肢重度機能障害者のためにヨーロッパで生まれたスポーツ。ボールを自力で投げられない選手は、補助具(ランプ)を使ってアシスタントの補助を受けて投球する。日本は2016年のリオパラリンピック団体戦で銀メダルを獲得した。

—駿さんは、家族でボッチャに 取り組んでいることをどう感じていますか。

(駿) 練習を手伝ってくれる両親には感謝しています。僕は毎日、大学から帰宅すると、家で2~3時間練習をします。すると、たいてい母が付きっきりで練習を見ているので、フォームやボールを投げる位置などについて、2人で研究するのが日課になっています。

(勝) 練習会場を毎日借りることはできないので、普段は家の玄関からリビングにつながる廊下で練習をしています。ボッチャは障害の程度によってクラス分けがあり、駿は手でボールが投げられるBC2クラスです。同じクラスの選手でも、障害が軽い人もいれば、駿のように重い人もいます。ですから駿がBC2クラスで勝つには、きれいなフォームを磨き、投球の精度を高めるしかないのです。家の廊下は車椅子が1台通るだけの幅しかありませんが、まっすぐ投げる練習くらいはできます。毎回、練習する駿を動画で撮影し、それを見せながらあれこれ口を出しています(笑)。

—駿さんが所属する「ノーブルウィングス」は どのようなチームですか。

(敏) 2012年のロンドンパラリンピックの後、いくつかの国内大会で負けてしまったのです。「このままではまずい」との気持ちから、^{ひろ せ たかゆき}廣瀬隆喜選手をはじめ一緒に練習していた5人でチームを結成し、競技環境を整えることを始めました。

(勝) チーム名は、日本語にすると「気高き翼」です。リオパラリンピックの銀メダリストで、チームキャプテンでもある廣瀬選手が「試合に出られない翼の名前をチーム名に入れたい」と提案し、皆が賛同してくれたのです。強いだけではなく、常に上を向き、「気高き翼で世界に羽ばたく」との意味が込められています。

(翼) みんなといっしょ。がんばれー!

(勝) 昔から物怖じしない性格なんですよ(笑)。

(駿) 兄はチームのムードメーカーです。小さい頃はケンカしてよく叩かれましたが(笑)。

—駿さんは、大学卒業後、 どのような人生を歩みたいですか。

(駿) ボッチャに関しては、2020年の東京パラリンピックに出場したいです。そのためにも、今、大学4年生ですから、きちんと仕事に就いて、ボッチャと両立できるようにしたいと思っています。

(敏) 親としても、2020東京大会への出場を応援しています。実をいえば、今まで家族でボッチャに取り組んできた環境下で、駿が自立できるか心配でした。ところが先日、ボッチャの合宿に私が付き添うつもりで



「2020は大きな目標ですが、それで終わりではない。その先の人生を生きていくための経験を積んでほしい」(父・敏英さん)

いたら、駿から「来なくていい」と言われたのです。駿が少しずつ自立していく姿を見ることができた思いでした。私も妻もいずれは老いるので、これから一人で生きていく力を身につけてほしいと願っています。

(勝) これからの長い人生を、自らの手で切り開いていってくれたらうれしいですね。2020東京大会が、その自立のきっかけになればと思っています。

—最後にボッチャの魅力を教えてください。

(駿) 試合では、対戦チーム同士で多角的な戦略を立てるので、最後の最後まで勝敗が読めません。技術面についても、ただボールを投げるのではなく、さまざまな技があるので面白いですよ。

(敏) ルールが簡単なので、のめり込みやすいスポーツです。見るだけではなく実際にやってみると、たいいの方が熱くなりますね。

(勝) ボッチャは、私たち家族に新しい居場所をつくってくれました。その意味で、ボッチャにはとても感謝しています。ボッチャは、年齢も障害も関係なく、誰もがができるスポーツですから、さまざまな理由で外に出ることをためらっている人にも、一歩踏み出すきっかけにしてもらえるのではないかと思います。

また、体験会などに健常者の方が参加してくだされば、ボッチャに対する理解が深まり、それが心のバリアフリーにもつながると思うのです。そのことが結果として、障害者がよりボッチャに参加しやすい環境をつくることにもなるはずです。ボッチャにはその力があると信じて、これからも家族で向き合っていきたいと思っています。

インタビュー／林 勝一(東京都権啓発センター 専門員)
編集／奥田 みのり、小松 亜子 撮影(表紙・2~4ページ)／落合 由利子

●佐藤さん一家のあゆみ



1995年10月28日、翼さん、駿さん誕生。2002年、翼さんは区立小学校の特別支援学級に、駿さんは普通学級に入学。2004年、駿さんが小学3年生のときにボッチャと出会う。2009年、駿さんが東京2009アジアユースパラゲームズに出場。2005年、敏英さんが審判資格を取得。2013年、勝枝さんが東京ボッチャ協会副会長に就任。同年、駿さんがアジアユースパラ競技大会マレーシア2013に出場。現在、駿さんは日本ボッチャ協会強化指定選手(東京都認定アスリート)。

一般社団法人日本ボッチャ協会

<http://japan-boccia.net/>

東京ボッチャ協会(「ボッチャファン」サイト内)

<http://boccia-fan.net/>

チャリティーのディスコイベントでフィーバー!

障害者も楽しめる「立石ディスコ・アフタヌーン」

葛飾区立石で2か月に1回、障害者も楽しめるディスコイベントが開かれています。2005年に始まったこの催しは口コミで人気を広げ、開催日を心待ちにしているファンもいます。イベントの主催者に、活動に込めた思いなどをうかがいました。

障害者も健常者もみんなが楽しめるバリアフリーのディスコイベント「立石ディスコ・アフタヌーン」は、懐かしい雰囲気飲み屋街として注目されている葛飾区立石のカラオケバーを借り切って開催されます。70㎡ほどのフロアには50人を超える人たちがひしめき合い、まだ日の高い午後3時にもかかわらず、大変な盛り上がり。普段は見せない、思いきりはじけた障害者たちの姿に保護者や介助者はみな驚くといえます。

運営は地元有志を中心とした10人ほどの実行委員会です。レコードをかけるDJ、定番の振り付けを教える人、会場設営から入場受付まで、全てをメンバーがボランティアとして行っています。

代表を務めるのは、生まれも育ちも立石の大嶋高士さん。大嶋さんも青春時代には都心のディスコに足繁く通っていました。大人になって、自分たちが楽しめる場がもっと近所にあったらいいのにと



大嶋高士さん

思うようになったといえます。そこで、地元商店街の活性化事業を兼ねて、毎月末土曜日に開催する大人向けのディスコイベントを始めることにしました。そうした中、障害者も参加できるものを開きたいと大嶋さんが思い立ったのは、それから1年半ほど後に、あるTVドラマを見たことがきっかけでした。

「知的障害のある子がダンスを純粋に楽しんでる姿に心揺さぶられました。でも、ほとんどの障害者はディスコというものを知らないだろうな、彼ら彼女らにも心ときめく世界を教えてあげたいなあと思って」(大嶋さん)。

さっそくメンバーに話してみたところ、全員が賛成。どうすれば障害のある人たちも安心して参加できるか、葛飾区内の障害者施設に何度も見学や相談に出かけ、数回のテストを実施し本番に備えました。

2005年11月、満を持して開催した第1回が終わった時、大嶋さんたちは思わず涙を流したそうです。

「もとは自分たちが楽しむためだったのに参加した人たちが、逆に感謝してくれました。障害者の人

たちの満足そうな姿を見て、やってよかったと思いました」(大嶋さん)。

障害の種類や程度に合わせて対応することや、熱中

し過ぎを防ぐために途中休みを設けること、行き帰りの安全のため日中に開催することなど、障害者も楽しめるようさまざまな気遣いをしています。けれども障害者だからといって“特別扱い”するのはよくないと大嶋さんは言います。実は、大嶋さん自身も2015年に心臓手術を受け、今は障害者手帳を持っています。

「私のように、健常者が障害者になることもあるんです。そのことを知れば障害があるからと言って仲間はずれにしたりできません。ダンスを楽しむのに、障害と健常の区別なんて必要ないですよね」(大嶋さん)。

メンバーや会場オーナーなど大勢の人たちの理解と協力には感謝してもしきれないと大嶋さんは言います。しかし、会場がある京成立石駅周辺は大規模な再開発が予定されており、12年間続けてきたイベントの継続は危ぶまれています。隔月の開催を心待ちにしている大勢の人たちのためにイベントが続けられるよう、大嶋さんたちは新たな会場を提供してくれる協力者を探しています。

インタビュー／鎌田晋明(東京都人権啓発センター 専門員) 編集／脇田真也



ものすごく盛り上がるダンスフロアの様子

もっと知りたい!

立石ディスコ・アフタヌーン
http://www.goodman.co.jp/disco/an01.htm

開催日時 偶数月の最終土曜日、午後3:00～5:30
会場 クラブハウス夢幻(葛飾区立石7-2-1)
京成立石駅から徒歩2分、ゲームセンター2階
参加費 一般1,000円、障害者500円

※収益は障害者施設や災害被災地に寄付されます。



<取材先情報>

・立石ディスコナイト実行委員会
http://www.goodman.co.jp/disco/open.html

大人向けの
「立石ディスコ・ナイト」は
毎月最終土曜夜!

子どもに「当たり前」の成長を

貧困の連鎖を断ち、子どもの人権が守られる社会へ

日本では、17歳以下の子どもの13.9%が貧困の状態に置かれています。これは、経済的な理由から十分な食事が取れなかったり、進学を断念したりする子どもの割合です。しかし、本来子どもには、十分な栄養を取り、健康的に成長する権利や、教育を受ける権利があります。私たちは、子どもの権利を守るために何をすべきでしょうか。

子どもの貧困と人権とのかかわり

貧困とは、水や食料、教育、仕事、住居など、生きていくうえで必要な基本的な物が欠けている状態ですが、その定義は様々あります。特に、先進国では、国民一人ひとりの手取り収入を試算して順番に並べたとき、中央値の半分に満たない人を「貧困」と定義しており、これを「相対的貧困」といいます^{*1}。例えば、毎食、温かい食事を取り、友人と遊び、勉強をし、希望する高校や大学に進学するといった、先進国では当たり前とされる生活ができない状態を指しています。

厚生労働省の最新の調査結果^{*2}によると、2015年時点で、日本の子どもの13.9%、およそ7人に1人が、この相対的貧困の状態にあります。この割合は先進国の中では高い数値ですが、社会の理解はそれほど進んでいるとはいえません。原因の一つは、多くの人が「貧困」を「衣食住に事欠き、命すら危うい状態」とイメージするからです。しかし、これは「絶対的貧困」といわれ、先進国ではほとんど見られません。このため、日本では貧困が認識されにくく、社会でも活発な議論が交わされてきませんでした。

しかし、実際に貧困状態にある子どもは、1日の食事が給食のみであったり、具合が悪くても病院に行けなかったりと、本来、子どもなら当然保障されるべき生活ができない環境に置かれています。この現状は、子どもの権利にかかわる深刻な問題です。

子どもの権利は、1989年に国連で採択され、翌年、国際条約として発効された「児童の権利条約」に定められています。主な権利として、十分な食事や社会的保障が得られる「生きる権利」、教育や余暇の機会が得られる「育つ権利」、差別や虐待を受けない「守られる権利」、グループ活動などに参加できる「参加する権利」があります。この条約は、国際情勢に合わせて改善が重ねられており、現在、人権条約としては史

上最多の締約国を得ています。日本は1994年に批准、発効し、国が施策を進めているところです。

子どもの貧困が解消されない理由

しかし、日本で条約が発効されてからも、国内の子どもの相対的貧困率は世界の主要34か国の平均値を上回っています^{*3}。そんな中、なかなか貧困状態が解消されない理由として、特に指摘されているのが「貧困の連鎖」です。これは、親から子へと、世代をまたいで貧困が引き継がれてしまうことです。

例えば、貧困状態にある親は暮らしていくのに精一杯です。なかでもひとり親世帯の貧困率は50.8%に達します。金銭的にも精神的にも、子どもの教育に投資するゆとりがありません。すると、子どもは学習への意欲や機会を失いやすく、低学力や低学歴の傾向が強まります。また、十分な食事を与えられていないために、気力や集中力に欠け、授業に身が入らないケースも少なくありません。このような子どもたちは、成長しても学歴の低さから低賃金の職業に就かざるを得なくなり、やがて子どもを持ったとしても、結局、自らと同じ道をたどらせやすいというわけです。

この悪循環を重く見た政府は、2014年に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を施行、さらに同年、対策の基本方針を示した「子供の貧困対策に関する大綱」を策定しました。この大綱には、子どもの生活支援や教育支援、保護者の就労支援などを推進することで、貧困の連鎖の解消を目指すとし示されています。

ところが、2016年、NPO法人さいたまユースサポートネットが全国479自治体に調査した結果、貧困状態にある子どもに対し「学習支援の実施を予定していない」と回答した自治体が45.3%に上ったことが分かりました。理由の多くは「人員や団体が確保できない」「財源が確保できない」というもので、貧困状態にある子どもに、行政の十分な支援が届いていない

実態が明らかになったのです。

地域住民が貧困家庭をサポート

こうした中、期待を寄せられるのが貧困家庭やその子どもを支援する地域住民の活動です。特に注目を集めるのが、公民館や個人宅を開放し、無料または安価で食事を提供する「子ども食堂」や、無料の学習支援です。特に子ども食堂は、近年、各地で開設が相次ぎ、全国で少なくとも300カ所以上、そのうち約60カ所は都内で運営されています。

この取り組みを全国に先駆けて行ってきたのが、東京都豊島区のNPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークです。現在、区内で運営する4つの子ども食堂では、それぞれ月2回、子どもなら無料または100円で、栄養バランスのとれた温かい夕食を食べることができます。そのうちの一つ、「椎名町子ども食堂」では、食事の前に「宿題タイム」を設けており、



子ども食堂で過ごす子どもたち。皆で遊ぶのも大きな楽しみだ

毎回、ボランティアが子どもたちの学習支援を行っています。また、区内3カ所週1回、地域の大人や学生ボランティアが無料の学習会を実施するなど、家庭状況に左右されることなく学べる場を地域に点在させることを目指しています。

事務局長の天野敬子^{あまの けいこ}さんは、これらの取り組みで大切にしていることを次のように話します。「子どもが安心して過ごせる居場所にしたいと考えています。その子どもが貧困かどうかは、見た目ではわからないので、ここは誰が来てもいいのです。多いときで100食分がなくなるときもあります。子どもは自分から相談窓口に行くことはできません。ここで一人の子どもが信頼できる大人とつながり、困っていることの一端でも言葉にできることが大切です」。

他人事ではなく、社会全体の問題として

一方で、貧困状態にある子どもの親にとっても、こうした地域の居場所が必要です。子ども食堂の多くは、

大人も300円程度で食事をするができるため、親子連れで利用するケースが少なくありません。すると、子どもが食事をしたり遊んだりしている間に、親が運営スタッフに悩み事を相談する姿も見られるといいます。特にひとり親は、「金銭的余裕がなくなれば人付き合いも減っていき、孤立しがちなので、子ども食堂が数少ない相談や息抜きの場になっている」といいます。「子どもの貧困は親の責任だ」と非難されがちですが、「本当に問題なのは、非正規雇用が増え、格差を拡大させている社会の仕組みではないでしょうか。とはいえ、景気回復を待ってもいられません。人と人がつながり助けあうことで笑顔になれる地域の居場所づくりが必要です」(天野さん)。

しかしながら、貧困状態にある子どもとの接点が少ない人たちにとって、この課題を身近に感じるのには難しいことかもしれません。そこで、日本財団が2015年に発表したのが「子どもの貧困の社会的損失推計」です。このまま貧困対策が行われなかった場合、日本の社会にどれだけの損失を生むのかを推計しています。

調査結果によると、仮に15歳の子ども18万人の貧困対策を1学年行わないと、彼らの生涯所得の合計額は2.9兆円減り、政府の財政負担が1.1兆円増加するということです。こうした面からも、子どもの貧困が私たちと無関係ではないことが分かります。

多くの子どもは、貧困状態が長引くと将来への希望も自尊感情も失ってしまうといいます。子どもが生きる気力を失わず、当たり前になる成長できる権利を保障する必要があります。そのためには、私たち一人ひとりがこの課題に関心をもつと同時に、行政による根本的な対策が急がれます。

インタビュー／林 勝一(東京都人権啓発センター専門員) 編集／小松亜子

※1、※2 厚生労働省「平成28年 国民生活基礎調査の概況」

※3 内閣府「平成26年版 子ども・若者白書」



貧困状態の
子どもを支援したい
と思ったら



豊島子どもWAKUWAKUネットワーク
事務局長 天野敬子さん



子ども食堂をつくらう!

豊島子どもWAKUWAKUネットワーク編 明石書店

地域の子ども食堂や、学習支援のボランティアをしてみたいかでしょうか。映画『さといきたらええやん』の鑑賞もお勧め。貧困対策の関係者がこぞって推奨するドキュメンタリーです。

●NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

<http://toshimawakuwaku.com/>

TEL : 090-3519-3745

E-mail : info@toshimawakuwaku.com

A 東京都人権プラザ 展示室 企画展「ダイバーシティ・スポーツ 2017」

スポーツと社会的包摂をテーマにさまざまな取り組みを紹介し、競技用具や関連書籍の展示もあり。

- 会期 2017年9月9日(土)から11月25日(土)まで
※祝日でも開室します。日曜は閉室。

- 時間 9:30～17:30

- 会場 東京都人権プラザ 企画展示室
(港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1階)

- お問い合わせ 東京都人権プラザ
TEL 03-6722-0123 <http://www.tokyo-hrp.jp/>

入場無料



B 9月は東京都自殺対策強化月間です! 「自殺防止!東京キャンペーン」



こころといのちの講演会「若者の自殺予防を考える」

- 日時 2017年9月30日(土) 14:00～17:00

入場無料

- 会場 東京福祉大学 池袋キャンパス9号館(地下1階)

- 申込方法 HPをご覧ください。

第一部 講演 「生きていく力とは?—若者の居場所、生きがい—」

講師 鈴木康明(東京福祉大学心理学部長 教授)

区市町村の取組事例紹介

「若者のいのちを守る」ハートプロジェクト事業

豊島区

第二部 大学生によるパネルディスカッション

http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/tokyokaigi/torikumi/campaign/campaign_2909.html



特別電話相談 「東京都自殺相談ダイヤル ～こころといのちのほっとライン～」 ひとりで悩まないで、一緒に話しませんか。

- 電話 0570-087478

- 日時 2017年9月12日(火)～16日(土) 24時間
※年中無休。上記以外の日は14:00～翌朝5:30

- 東京都こころといのちのほっとナビ～ここナビ～

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kokonavi/>

- お問い合わせ

東京都福祉保健局 保健政策部 保健政策課

自殺総合対策担当 TEL 03-5320-4310



C 東京都人権プラザ図書資料室 イベント 「アイヌのおはなしと、うたとおどり」

アイヌの講師による絵本読み聞かせ。
絵本のあとは、みんなでアイヌの歌と踊りをおぼえよう!

- 日時 2017年10月21日(土) 13:00～15:00
- 会場 東京都人権プラザ 図書資料室ほか(港区芝2-5-6 芝256スクエアビル2階)
- 講師 丸子美記子(関東ウタリ会) 今井とわ(関東ウタリ会)
- 定員 40名
- 申込方法 事前申込制、先着順 ※申込受付は、10月2日(月)より開始します。
- 参加費 無料
- お問い合わせ (公財)東京都人権啓発センター 図書イベント担当 TEL 03-6722-0085 <http://www.tokyo-hrp.jp/>

ボン メノコウサ カツケマウサ
アイヌのおねえさんとおぼさんと
シノツチャキ アンロー!
あそぼう!

(公財)東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

皆様とパートナーシップを築き、人権意識の高揚、人権問題の解決に向けて、ともに手を携えてまいりたいとの趣旨から賛助会員制度を設けております。趣旨にご賛同いただき、ご加入下さるようご案内申し上げます。

個人
賛助会員

一口 2,000円

団体
賛助会員

一口 30,000円

- お問い合わせ

(公財)東京都人権啓発センター
総務課

TEL 03-6722-0082

※ 皆様の
団体
会員の
の

(公財)東京都中小企業振興公社
(株)首都圏環境美化センター
(公財)東京都歴史文化財団
(株)ミライト・テクノロジー
東京都中小企業団体中央会
東京都下水道サービス(株)

(一財)東京都営交通協会の
(一社)東京都信用組合協会
東京人権啓発企業連絡会
(公財)東京都学校給食会
(一社)東京環境保全協会
(株)東京国際フォーラム

東京臨海高速鉄道(株)
(公財)東京都環境公社
(株)東京エイドセンター
(公財)東京しごと財団
東京水道サービス(株)
東京交通サービス(株)

東京都住宅供給公社
東京都職員信用組合
東京都商工会連合会
東京臨海熱供給(株)
(株)東京ビッグサイト
(公財)東京観光財団

(公財)東京税務協会
(公大)首都大学東京
(一財)東京都済済会
自治労東京都本部
(株)東京交通会館
東京食肉市場(株)

NPO 法人 TEOS
(株)日本アクセス
東京港埠頭(株)
(株)ゆりかもめ
(有)関東紙業

(順不同)

●編集後記

写真展「人権という希望」が閉幕した。会期中展示した写真は300点以上。その一枚一枚に、心がざわつき、圧倒され、胸が暖められ、考えさせられた。写真とは実に豊かな表現物だと改めて思う。(林)

全く異なる課題に取り組む取材先同士が、既につながりを持っていることを知って驚くことがある。どんな社会問題も全て地続きだから、全体的な取り組みが必要なのだ、という事例を見た感じがする(餃)

TOKYO人権 Vol.75 2017年秋号
2017年8月31日発行(年4回発行)

- 制作・印刷/株式会社トライ

- 発行/公益財団法人 東京都人権啓発センター
〒105-0014 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル 2階
TEL 03-6722-0086 FAX 03-6722-0084
<http://www.tokyo-jinken.or.jp/>